

梵文和訳『阿毘達磨集論』(3)

阿毘達磨集論研究会

研究会代表者	那須良彦（社会福祉法人金剛樹心会理事長）		
研究会メンバー	加納和雄（駒沢大学講師）	李 学竹（中国蔵学研究中心宗教研究所教授）	
	吉田 哲（龍谷大学准教授）	松下俊英（大谷大学非常勤講師）	
	早島 慧（龍谷大学講師）	横山 剛（日本学術振興会特別研究員）	
	高務祐輝（京都大学非常勤講師）	間中 充（龍谷大学非常勤講師）	
	吹田隆徳（佛教大学大学院生）	田中裕成（佛教大学大学院生）	
	奥野自然（龍谷大学大学院生）	中山慧輝（京都大学大学院生）	

はじめに

本稿は、阿毘達磨集論研究会[2017]の続編であり、『阿毘達磨集論』(*Abhidharmasamuccaya*)とその注釈『阿毘達磨集論釈』(*Abhidharmasamuccayabhāṣya*)の梵文テキストを再校訂し、その和訳を試みるものである。前稿と同様に両論書の和文完訳が未刊行である点、および、新たに確認された『阿毘達磨集論』(*Abhidharmasamuccayavyākhyā*)梵文写本の読みを踏まえた梵文の再検討が必要である点、主にこの二点を理由に、その梵本再校訂と和訳を目指す。

本稿に収録する部分は、第一篇「本事分」の第一章「三法」中の「建立」における、「行蘊建立」の一部である。「行蘊建立」は、心所法を列挙し、それぞれを「特徴」(*lakṣaṇa*)と「作用」(*karman*)の二点から定義する。本稿が収めるのは、心所法中の煩惱法の箇所に対応する。この箇所は貪、瞋、慢、無明、疑、五見それぞれの「特徴」と「作用」を説き、さらに五見をいくつかの観点から分類する。

研究会では、代表者である那須良彦が下訳と注を準備し、加納和雄をはじめとする班員がそれを検討するという仕方で作業を進めた。梵文原典の校訂は、李学竹の全面的な協力によりなされた。

校訂と訳について

本稿で提示する『阿毘達磨集論』の梵文校訂テキスト（暫定版）は、ゴーカレーの刊本およびその原本たる梵文写本（写本影印 Gottingen Xc 14/23–24 (a) を使用）と、梵文『阿毘達磨雜集論』から回収される対応箇所（Li [2016] 所掲梵本翻刻）とを対校したものである。ブラダンによる還梵テキストは参照するに留めた。また、『阿毘達磨集論釈』も同様に、クティアの刊本およびその原本たる梵文写本（写本影印 Gottingen Xc 14/23–24 (b) を使用）と、梵文『阿毘達磨雜集論』から回収される対応箇所（Li [2016] 所掲梵本翻刻）とを対校した校訂テキストを提示した。

本稿の校訂テキストにおいて、異読や訂正は適宜注記したが、写本特有の綴り字や連声の標準化、アヴァグラハの追加、および分節の添削については煩を避けるため逐一報告しない。『阿毘達磨集論釈』において太字で示した箇所は、『阿毘達磨集論』の本文を指す。

訳語に関して、個別の法の名称は術語（テクニカルターム）として理解して伝統的な漢訳（主に玄奘の訳語）を充て、それ以外は、現代表現（とくに和語）を用いた。そして必要に応じて、現代表現に対応する伝統的漢訳表現を丸括弧で補った。

本稿で提示するテキストには諸法の定義が列挙され、それぞれの定義にはアビダルマや唯識の諸文献において各々対応する箇所が存在する。本来ならばその対応箇所を逐一報告する必要があるが、その作業はすでに『瑜伽行派の五位百法』をはじめとするバウッダコーシャシリーズにおいて網羅的になされている。そのため、本稿においては、作業の重複を避け、バウッダコーシャの該当箇所への言及によって、それに代えた。なお、『五蘊論』安慧釈（PSkV）の梵文については、『瑜伽行派の五位百法』以後に出版されたため、該当箇所のみを適宜示す。

凡例

本稿では梵文テキストと和訳を見開きで提示する。提示する梵文テキスト並びにその中で使用した記号は、Li & Kano [2014]、Li [2015] [2016] の提示する校訂テキストに従う。三角△は、梵文写本における改行位置を示す。

科段

- 1.1.5.1.4.1.20 貪
- 1.1.5.1.4.1.21 瞋
- 1.1.5.1.4.1.22 慢
- 1.1.5.1.4.1.23 無明
- 1.1.5.1.4.1.24 疑
- 1.1.5.1.4.1.25 有身見
- 1.1.5.1.4.1.26 辺執見
- 1.1.5.1.4.1.27 見取
- 1.1.5.1.4.1.28 戒禁取
- 1.1.5.1.4.1.29 邪見
- 1.1.5.1.4.1.30 見に関する細論
- 1.1.5.1.4.1.30.1 増益の見と損減の見
- 1.1.5.1.4.1.30.2 過去世と未来世の見、捨置されたことがらに対する見
- 1.1.5.1.4.1.30.3 特に有身見について
- 1.1.5.1.4.1.30.3.1 有身見に摂められる五つの過失
- 1.1.5.1.4.1.30.3.2 二十項からなる有身見
- 1.1.5.1.4.1.30.3.3 我見と我所見
- 1.1.5.1.4.1.30.3.4 我所見である理由
- 1.1.5.1.4.1.30.3.5 確認された事物に関わるものか、確認されていない事物に関わるものか

1.1.5.1.4.1.20 貪

【AS】 AS-Ms 3v4–5 (Gokhale 16.20) , ASVy-Ms 11v6 (Li [2016: 222.12]) , cf. 早島 48.

AS 3v5 rāgaḥ _△katamaḥ. traidhātuko 'nunayaḥ. duḥkhasaṃjanana⁽¹⁾-karmakaḥ.⁽²⁾

【ASBh】 ASBh-Ms 7r4–5 (Tatia 5.24–25) , ASVy-Ms 11v6–12r1 (Li [2016: 222.13]) , cf. 早島 48.

Bh 7r5
Vy 12r1 duḥkhasaṃjananakarmaka itī tṛṣṇāvaśena pañcopādānaskandhanirvartanāt.
_△ _△

1.1.5.1.4.1.21 瞋

【AS】 AS-Ms 3v5 (Gokhale 16.20–21) , ASVy-Ms 12r1 (Li [2016: 222.14–15]) , cf. 早島 48.

pratighaḥ katamaḥ. sattveṣu duḥkhe duḥkhasthānīyeṣu⁽³⁾ ca dharmeṣv āghātaḥ.
asparśavihāraduścaritasamniśrayadānakarmakaḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 7r5 (Tatia 5.25) , ASVy-Ms 12r1–2 (Li [2016: 222.16]) , cf. 早島 48.

Vy 12r2 asparśavihāra āghātacittasya duḥkhavihārāt.⁽⁴⁾
_△

(1) duḥkhasaṃjanana] AS-Ms ASVy-Ms, duḥkhasaṃjavana Gokhale.

(2) -karmakaḥ] ASVy-Ms, -karmikaḥ AS-Ms.

(3) duḥkhe duḥkhasthānīyeṣu] em. (Cf. 阿毘達磨集論研究会 [2017: 72.14] , Gokhale), duḥkhe duḥkhasthānīyeṣu AS-Ms, duḥkhaduḥkhasthānīyeṣu ASVy-Ms.

(4) duḥkhavihārāt] ASBh-Ms, duḥkhaviharanāt ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.1.20 貪

【問】貪とは何か。【答】三界に属する愛である。〔そして、〕苦を生じさせる作用をもつ⁽⁵⁾。

「苦を生じさせる作用をもつ」とは、渴愛によって五取蘊が生起するからである。

1.1.5.1.4.1.21 瞋

【問】瞋とは何か。【答】有情たち、苦、苦に相当する諸法に対して怒ることである⁽⁶⁾。〔そして、〕不快に過ごすこと（不安穩住）⁽⁷⁾と悪行によりどころを提供する作用をもつ⁽⁸⁾。

「不快に過ごすこと」とは、怒った心の者は苦をともなつて過ごすからである。

⁽⁵⁾ AS における愛結の定義は Li [2013: 248.31–33] を参照。他論書の貪の定義は、BK-I 148–149、BK-II 91–93、BK-III 195–196、BK-IV 217–218、BK-V 33–34、PSkV 50–51 参照。

⁽⁶⁾ 「苦に相当する諸法」については、阿毘達磨集論研究会 [2017: 72 (fn. 52)] を参照。

⁽⁷⁾ PSkV は *sparśavihāra* を具格の格限定複合語と理解する。これを参考にした。

Cf. PSkV 51.16–18:

sparśaḥ sukham. tena sahito vihāraḥ sparśavihāraḥ. na sparśavihāro 'sparśavihāraḥ, duḥkhasahita ity arthaḥ.

⁽⁸⁾ AS における瞋結の定義は Li [2013: 248.33–249.1] を参照。他論書の瞋の定義は、BK-I 150–151、BK-II 94–96、BK-III 197–199、BK-IV 219–221、BK-V 35–36、PSkV 51–52 参照。

1.1.5.1.4.1.22 慢

【AS】 AS-Ms 3v5 (Gokhale 16.21–22) , ASVy-Ms 12r2 (Li [2016: 222.17–18]) , cf. 早島 48.

mānaḥ katamaḥ. satkāyadr̥ṣṭisaṃnīśrayeṇa cittasyonnatiḥ. agauravaduḥkhotpatti-
saṃnīśrayadānakarmakaḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 7r5–7v1 (Tatia 5.26–6.1) , ASVy-Ms 12r2–3 (Li [2016: 222.19–20]) , cf. 早島 49.

agaauravaṃ guruṣu guṇavatsu ca stabdhataḥ. **duḥkhotpattiḥ** punarbhavotpattir
veditavyā.

1.1.5.1.4.1.23 無明

【AS】 AS-Ms 3v5–6 (Gokhale 16.22–23) , ASVy-Ms 12r3 (Li [2016: 222.21–223.1]) , cf. 早島 48.

avidyā katamā. traidhātukam ajñānam. dharmeṣu mithyānīścayavicikitsāsamkleśo-
tpattisaṃnīśrayadānakarmikā.

【ASBh】 ASBh-Ms 7v1 (Tatia 6.1–3) , ASVy-Ms 12r3–4 (Li [2016: 223.2–3]) , cf. 早島 49.

mithyānīścayo⁽⁹⁾ viparītaṃ jñānam,⁽¹⁰⁾ **vicikitsā** saṃśayaḥ, **saṃkleśotpattī**
rāgādikleśasamudācāraḥ. **tatsaṃnīśraya**⁽¹¹⁾-**dānaṃ** mūḍhasya sarvakleśapavṛtter
iti.

⁽⁹⁾ mithyānīścayo] ASVy-Ms 佐久間, mithyānīścayair ASBh-Ms.

⁽¹⁰⁾ viparītaṃ jñānam] ASBh-Ms, viparītajñānam ASVy-Ms.

⁽¹¹⁾ tatsaṃnīśraya] ASVy-Ms, tatsaṃnīśriya ASBh-Ms.

1.1.5.1.4.1.22 慢

【問】慢とは何か。【答】有身見をよりどころとして心が高ぶることである。〔そして、〕不敬と苦の生起とによりどころを提供する作用をもつ¹²⁾。

「不敬」とは、先生たちや徳のある人々に対して意固地であることである。「苦の生起」とは、未来の〔輪廻的〕生存（後有）の生起であると理解されるべきである。

1.1.5.1.4.1.23 無明

【問】無明とは何か。【答】三界に属する無智である。〔そして、〕諸法に対する誤った決定と疑と雑染の生起とによりどころを提供する作用をもつ¹³⁾。

「誤った決定」とは、倒錯した智である。「疑」とは、疑念である。「雑染の生起」とは、貪などの煩惱が現に起こること（現行）である。それらに「よりどころを提供する」というのは、愚癡なる者にはあらゆる煩惱が起こるからである。

¹²⁾ AS における慢結（七慢）の定義は Li [2013: 249.2–17] を参照。他の論書における慢の定義については、BK-I 152–153、BK-II 97–100、BK-III 200–204、BK-IV 222–227、BK-V 37–38、PSkV 52 参照。

¹³⁾ AS における無明結の定義は Li [2013: 249.18–20] を参照。他の論書における無明の定義については、BK-I 95–98、BK-II 101–103、BK-III 146–148、BK-IV 150–153、BK-V 39–40、126–140、PSkV 54–55 参照。

1.1.5.1.4.1.24 疑

【AS】 AS-Ms 3v6 (Gokhale 16.23–24) , ASVy-Ms 12r4–5 (Li [2016: 223.4–5]) , cf. 早島 48.

Vy 12r5 vicikitsā katamā. satyeṣu vimatiḥ. kuśalapakṣāpravṛttisaṃniśrayadānakarmikā.

【ASBh】 ASBh-Ms 7v1–2 (Tatia 6.3–4) , ASVy-Ms 12r5 (Li [2016: 223.6–7]) , cf. 早島 49.

Bh 7v2 **satyeṣu vimatī** ratneṣu vimatiḥ,⁽⁴⁾ mārgasatye nirodhasatye ca yathāyogam. tayā **kuśalapakṣe 'pravṛttir** alabdhaniścayasyānārambhāt.

1.1.5.1.4.1.25 有身見

【AS】 AS-Ms 3v6–7 (Gokhale 16.24–25) , ASVy-Ms 12r5–6 (Li [2016: 223.8–10]) , cf. 早島 50.

Vy 12r6 satkāyadrṣṭiḥ katamā. pañcopādānaskandhān ātmata⁽⁵⁾ ātmīyato vā samanupaśyato yā
AS 3v7 kṣāntī rucir⁽⁶⁾ matiḥ prekṣā drṣṭiḥ. sarvadrṣṭigatasamniśrayadānakarmikā.

1.1.5.1.4.1.26 辺執見

【AS】 AS-Ms 3v7 (Gokhale 16.26–27) , ASVy-Ms 12r6–b1 (Li [2016: 223.11–13]) , cf. 早島 50.

Vy 12b1 antagrāhadrṣṭiḥ katamā. pañcopādānaskandhān śāśvatata⁽⁷⁾ ucchedato vā samanupaśyato⁽⁸⁾ yā kṣāntī rucir matiḥ prekṣā drṣṭiḥ. madhyamāpratipanniriyāṇaparipanthakarmikā.⁽⁹⁾

【ASBh】 ASBh-Ms 7v2–3 (Tatia 6.5) , ASVy-Ms 12b1–2 (Li [2016: 223.14]) , cf. 早島 51.

Bh 7v3 **madhyamāpratipac** chāśvatocchedagrāhavarjitaṃ⁽²⁰⁾ pratītyasamutpādayānānam.
Vy 12b2

⁽⁴⁾ satyeṣu vimatī ratneṣu vimatiḥ] em., ratneṣu vimatiḥ ASBh-Ms, satyeṣu vimatir ASVy-Ms. 詳細については本稿脚注 (22) を参照。

⁽⁵⁾ ātmata] ASVy-Ms Gokhale, ātmataḥ AS-Ms.

⁽⁶⁾ rucir] AS-Ms Gokhale, cir ASVy-Ms.

⁽⁷⁾ śāśvatata] ASVy-Ms, śāśva[ta]to vā Gokhale, śāśvato vā AS-Ms.

⁽⁸⁾ samanupaśyato] ASVy-Ms, samanupaśyataḥ AS-Ms Gokhale.

⁽⁹⁾ madhyamāpratipanniriyāṇaparipanthakarmikā] AS-Ms Gokhale, madhyamā pratipat niryāṇaparipanthikarmikā ASVy-Ms.

⁽²⁰⁾ -pratipac chāśvatocchedagrāhavarjitaṃ] ASBh-Ms Tatia, -pratipat śāśvatocchedagrāhavarjita ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.1.24 疑

【問】疑とは何か。【答】諸諦に対する戸惑いである。〔そして、〕善の側に向けて活動しないことによりどこをを提供する作用をもつ²⁰⁾。

「諸諦に対する戸惑い」とは、〔三〕宝に対する戸惑いである。〔そして、それは〕適宜、道諦に対する〔戸惑い〕と滅諦に対する〔戸惑いに対応する〕²¹⁾。それ（戸惑い）によって、「善の側に向けて活動しないこと」になる。決定を得ていない者は始めないからである。

1.1.5.1.4.1.25 有身見²²⁾

【問】有身見とは何か。【答】五取蘊を我である、あるいは我所であると見る者にある、忍、欲楽、覚知、観察、見なるものである。〔そして、〕あらゆる見の類によりどこをを提供する作用をもつ。

1.1.5.1.4.1.26 辺執見

【問】辺執見とは何か。【答】五取蘊を恒常なものである、あるいは断滅するものであると見る者にある、忍、欲楽、覚知、観察、見なるものである。〔そして、〕中道による出離を障げる作用をもつ。

「中道」とは、恒常である、あるいは断滅するという執着を離れた、縁起の智である。

²⁰⁾ AS における疑結の定義は Li [2013: 249.29–32] を参照。他論書の疑の定義は、BK-I 154–155, BK-II 104–106, BK-IV 228–231, PSkV 63–64 参照。

²¹⁾ この一節は、先行研究では ASVy-Ms の *satyeṣu vimatir* にもとづいて「〔諸諦に対する戸惑い〕とは、適宜、道諦ならびに滅諦に対する〔戸惑い〕である」といった解釈がなされてきた。この場合「諸諦」（複数形）であるにもかかわらず、道諦と滅諦にしか言及がないという問題が残る。この点に関して、『雑集論』（T [31] 698a11）には「於諦猶豫者亦攝於實猶豫」とあるが、この「實」が宮内庁本では「寶」となっており、その場合「〔諸諦に対する戸惑い〕とは〔三〕宝に対する戸惑いである」という内容である。以上の『雑集論』の内容と ASBh-Ms における *ratneṣu vimatiḥ* という読みを合わせて考えて、原文では *satyeṣu vimati ratneṣu vimatiḥ* であったものが、ASBh-Ms と ASVy-Ms では重複的な表現の片方が抜け落ちたものと理解し、このように暫定的に校訂した。この校訂であれば、冒頭に記した問題も解決するものと考えられる。なお、『雑集論述記』（卅統 [48] 48：於諦猶豫（至）道諦攝故。述曰三寶無漏滅道諦攝故於諦疑法身理法真實滅諦所攝二身餘法僧道諦所攝同體寶者隨應所攝此釋體文。）もこの解釈を支持する。

²²⁾ 以下、AS および他の論書における五見については、瀧川 [2011] 参照。

1.1.5.1.4.1.27 見取

【AS】 AS-Ms 3v7–4r1 (Gokhale 16.27–29) , ASVy-Ms 12b2–3 (Li [2016: 223.15–17]) , cf. 早島 50.

dr̥ṣṭiparāmarśaḥ katamaḥ. dr̥ṣṭim dr̥ṣṭyāśrayāṃś ca pañcopādānaskandhān agrataḥ
śreṣṭhato viśiṣṭataḥ paramataś ca⁽²⁴⁾ samanupaśyato yā kṣāntī rucir matih prekṣā dr̥ṣṭih.
asaddr̥ṣṭyabhiniveśasaṃniśrayadānakarmakaḥ.

1.1.5.1.4.1.28 戒禁取

【AS】 AS-Ms 4r1 (Gokhale 16.30–31) , ASVy-Ms 12b3–4 (Li [2016: 223.18–20]) , cf. 早島 50.

śīlavrataparāmarśaḥ katamaḥ. śīlaṃ vrataṃ śīlavratāśrayāṃś⁽²⁵⁾ ca pañcopādāna-
skandhān śuddhito muktito⁽²⁶⁾ nairyāṇikataś ca samanupaśyato yā kṣāntī rucir matih
prekṣā dr̥ṣṭih. śramavaiphalayasamniśrayadānakarmakaḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 7v3 (Tatia 6.6) , ASVy-Ms 12b4–5 (Li [2016: 223.21]) , cf. 早島 51.

śīlavrataṃ kudr̥ṣṭipūrvakaṃ veditavyam. śramavaiphalyaṃ tenāniryāṇāt.

⁽²⁴⁾ viśiṣṭataḥ paramataś ca] AS-Ms Gokhale, viśiṣṭataś ca ASVy-Ms.

⁽²⁵⁾ śīlavratāśrayāṃś] ASVy-Ms Gokhale, śīlavratāṃś AS-Ms.

⁽²⁶⁾ muktito] AS-Ms, yuktito ASVy-Ms Gokhale.

1.1.5.1.4.1.27 見取

【問】見取とは何か。【答】見と見の所依である五取蘊とを、第一のものである、最高のものである、勝れたものである、最上のものであると見る者にある、忍、欲楽、覺知、觀察、見なるものである。〔そして、〕不正見に固執することによりどこをを提供する作用をもつ。

1.1.5.1.4.1.28 戒禁取

【問】戒禁取とは何か。【答】戒め（戒）と、誓い（禁）と、戒めと誓いの所依である五取蘊とを、清淨〔にするもの〕である、解脫〔をもたらすもの〕である、出離に関わるものであると見る者にある、忍、欲楽、覺知、觀察、見なるものである。〔そして、〕苦勞が無駄になることによりどこをを提供する作用をもつ。

〔この場合の〕「戒めと誓い」とは、惡見を前提としたものであると理解されるべきである。「苦勞が無駄になること」とは、そ〔の戒めと誓い〕によっては出離することがないからである。

1.1.5.1.4.1.29 邪見

【AS】 AS-Ms 4r1–2 (Gokhale 16.31–17.1) , ASVy-Ms 12v5–6 (Li [2016: 223.22–224.1]) , cf. 早島 52.

mithyādr̥ṣṭiḥ katamā. hetuṃ vāpavadataḥ phalaṃ vā kriyāṃ vā sad vā vastu nāśayataḥ
mithyā vā parikalpayato⁽²⁷⁾ yā kṣāntī rucir matiḥ prekṣā dr̥ṣṭiḥ. kuśalamūlasamuccheda-
karmikā, akuśalamūladṛḍḥatāsaṃniśrayadānakarmikā, akuśale pravṛttikarmikā,⁽²⁸⁾ kuśale
cāpravṛttikarmikā vā.

【ASBh】 ASBh-Ms 7v3–8r2 (Tatia 6.6–13) , ASVy-Ms 12v6–13r3 (Li [2016: 224.2–8]) , cf. 早島 53–55.

nāsti dattaṃ nāstīṣṭaṃ nāsti hutam⁽²⁹⁾ nāsti sucaritaṃ nāsti duṣcaritaṃ ity ayaṃ **hetv-
apavādaḥ**. nāsti duṣcaritasucaritānām karmaṇām phalavipāka ity **phalāpavādaḥ**. nāsty
ayaṃ loka nāsti paraloka nāsti mātā nāsti pitā nāsti sattva upapāduka ity **kriyāpavādaḥ**,
lokāntaragamanāgamanakriyāyā bījadhānakriyāyāḥ pratisaṃdhibandhakriyāyāś
cāpavādāt. na santi loke 'rhanta ity evamādi **sadvastunāśanam**.⁽³⁰⁾ tadanyad yat kiṃcid
viparītadarśanam tan **mithyāparikalpanam** veditavyam. **kuśalamūlasamucchedo**
viśiṣṭāyā eva mithyādr̥ṣṭer na sarvasyāḥ.

⁽²⁷⁾ parikalpayato] ASVy-Ms, vikalpayato AS-Ms.

⁽²⁸⁾ akuśale pravṛttikarmikā] AS-Ms, akuśalapravṛttikarmikā ASVy-Ms.

⁽²⁹⁾ hutam] ASBh-Ms 佐久間, kṛtam ASVy-Ms Tatia.

⁽³⁰⁾ sadvastunāśanam] ASBh-Ms, sadvastunāśanām ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.1.29 邪見

【問】邪見とは何か。【答】因であれ、果であれ、作用であれ〔それらが存在しないと〕否定する者、あるいは存在する事物を無いものとする者、あるいは誤って分別する者にある、忍、欲楽、覚知、観察、見なるものである。〔そして、〕善根を断絶する作用をもち、あるいは不善根が堅固であることによりどこをを提供する作用をもち、あるいは不善を起こす作用と善を起こさない作用をもつ。

「施物は存在しない。献物は存在しない。供物は存在しない。善行は存在しない。悪行は存在しない」というこれが「因〔が存在しないと〕否定すること」である。「諸々の悪行や善行の行為に関する異熟である果⁽³¹⁾は存在しない」というのが、「果〔が存在しないと〕否定すること」である。「この世間は存在しない。来世は存在しない。母は存在しない。父は存在しない。化生の有情は存在しない」というのが「作用〔が存在しないと〕否定すること」である。他世におもむくことや〔他世から〕やって来るという作用を、また種子を保持する作用を、そして結生の結合の作用を否定するからである。「世間において阿羅漢たちは存在しない」云々が、「存在する事物を無いものとする」とである⁽³²⁾。それら以外のあらゆる倒錯した見解が、「誤って分別すること⁽³³⁾」と理解されるべきである。「善根を断絶すること」は、顕著な邪見のみによるのであって、すべての〔邪見〕によるのではない⁽³⁴⁾。

⁽³¹⁾ 諸々の文献 (YBh 152.9 等) に頻出する “phalaṃ vipākaḥ” という表現をふまえて、同格限定複合語として訳した。なお、YBh の平行箇所に対する玄奘訳は「果及異熟」(T [30] 621b26) とあり、並列複合語と解釈する。

⁽³²⁾ この邪見に関する ASBh の注釈の内容は、以下の『聖道経』等の諸経典にもみられる。

『聖道経』(No. 183) 『中阿含』(T [26] 735c15–18) :

云何邪見。謂此見無施無齋。無有呪説。無善惡業。無善惡業報。無此世彼世。無父無母。世無真人。往至善處善去善向。此世彼世。自知自覺自作證成就遊。是謂邪見。

Cf. 本庄 [2014: 792 (no. 6080)] .

⁽³³⁾ AS の “mithyā vā vikalpayato” に言及していると理解した。

⁽³⁴⁾ 五見はいずれも広義の邪見であるが、五見のうち第五の邪見のみが損減する見であり、最も顕著であることから邪見と言われる。

Cf. AKBh 282.4–6:

sati duḥkhādisatye nāstīti dṛṣṭir mithyādṛṣṭiḥ. sarvaiva hi viparītasvabhāvapravṛttā dṛṣṭir mithyādṛṣṭiḥ ekaiva tūktā. atisaṃyavattvāt durgandhagṛhṭavat.¹⁾ eṣā hy apavādikā anyās tu samāropikāḥ. eṣā hy apavādikā anyās tu samāropikāḥ.

¹⁾ -ghṛtavat タン [2003: 59] , -kṣatavat AKBh.

1.1.5.1.4.1.30 見に関する細論

1.1.5.1.4.1.30.1 増益の見と損減の見

【AS】 AS-Ms 4r2–3 (Gokhale 17.1–3) , ASVy-Ms 13r3–5 (Li [2016: 224.9–11]) , cf. 早島 52.

vy 13r4 yā etāḥ pañca dṛṣṭaya āsām kati samāropadṛṣṭayaḥ katy apavādadṛṣṭayaḥ. catasraḥ
AS 4r3 samāropadṛṣṭayaḥ. jñeye svabhāvaviśeṣasamāropatām upādāya dṛṣṭau cāgrasuddhi-
vy 13r5 samāropatām upādāya.

【ASBh】 ASBh-Ms 8r2–3 (Tatia 6.14–16) , ASVy-Ms 13r5–6 (Li [2016: 222.12–14]) , cf. 早島 53–55.

pañcaskandhātmake⁽³⁵⁾ jñeya⁽³⁶⁾ ātmātmīyasvabhāvasamāropikā satkāyadrṣṭiḥ.
ātmanityānityaviśeṣasamāropikāntagrāhadṛṣṭiḥ. kudṛṣṭāv⁽³⁷⁾ agratāsamāropako
Bh 8r3 dṛṣṭiparāmarśaḥ. tatraiva śuddhisamāropakaḥ śīlavrataparāmarśaḥ.
Vy 13r6

【AS】 AS-Ms 4r3 (Gokhale 17.3) , ASVy-Ms 13r6 (Li [2016: 224.15]) , cf. 早島 52.

ekā yadbhūyasāpavādadṛṣṭiḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 8r3–4 (Tatia 6.16–17) , ASVy-Ms 13r6–v1 (Li [2016: 222.16]) , cf. 早島 53–55.

ekā yadbhūyaseti mithyāvikalpikāyā⁽³⁷⁾ nāvaśyam apavādikatvāt.⁽³⁸⁾

⁽³⁵⁾ pañcaskandhātmake] ASBh-Ms Tatia, pañcaskandhātmake ASVy-Ms.

⁽³⁶⁾ jñeya] ASBh-Ms, jñaiye ASVy-Ms.

⁽³⁷⁾ mithyāvikalpikāyā] ASBh-Ms ASVy-Ms 佐久間, mithyāvikalpikā yā Tatia 早島 Li [2016] .

⁽³⁸⁾ apavādikatvāt] Tatia, apavādikatvāt ASBh-Ms, apavādāt ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.1.30 見に関する細論³⁹⁾

1.1.5.1.4.1.30.1 増益の見と損減の見

【問】これら五見の中で、増益の見はいくつあるのか。損減の見はいくつあるのか。【答】増益の見は四つ（有身見、辺執見、見取、戒禁取）である。知られるべきもの（所知）に対して、自性と特質を増益することによってであり、見に対して、第一のもの〔であること〕、清浄〔にするものであること〕を増益することによってである。

五蘊を本質とする「知られるべきものに対して」、我と我所という「自性を増益する」のが有身見であり、我が恒常であるとか無常であるという「特質を増益する」のが辺執見である。悪見に対して、「第一のもの〔であること〕を増益する」のが見取である。その同じ〔悪見〕に対して、「清浄〔にするものであること〕を増益する」のが戒禁取である。

〔残る〕一つ（邪見）は概ね損減の見である。

「一つ（邪見）は概ね」というのは、誤って分別する〔という邪見⁴⁰⁾〕は必ずしも損減するものとはいえないからである。

³⁹⁾ 以下の増益、損減の見等に関する同様の議論は、VinSg (T [30] 603c 以下) にもみられる。Cf. Ahn [2003: 219–220] .

⁴⁰⁾ 上述の邪見の解説において、四種の邪見が列挙されるが、そのなかの四番目の「誤って分別すること」を指すと考えられる。

1.1.5.1.4.1.30.2 過去世と未来世の見、捨置されたことがらに対する見

【AS】 AS-Ms 4r3–4 (Gokhale 17.3–5) , ASVy-Ms 13v1–2 (Li [2016: 224.17–19]) , cf. 早島 52.

yāś ca pūrvāntakalpikā dr̥ṣṭayo yāś cāparāntakalpikā dr̥ṣṭayas tāḥ katibhyo dr̥ṣṭibhyo
veditavyāḥ. dvābhyām sarvābhyo vā.

yā avyākṛtavastuṣu dr̥ṣṭayas tāḥ katibhyo dr̥ṣṭibhyo veditavyāḥ. dvābhyām sarvābhyo
vā.

【ASBh】 ASBh-Ms 8r4 (Tatia 6.17–18) , ASVy-Ms 13v2 (Li [2016: 224.20]) , cf. 早島 53–55.

lakṣaṇato dvābhyām antagrāhamithyādr̥ṣṭibhyām, saparivārataḥ sarvābhyāḥ.

1.1.5.1.4.1.30.2 過去世と未来世の見、捨置されたことがらに対する見

【問】過去世（前際）を構想する見と、未来世（後際）を構想する見⁽⁴¹⁾は、〔五見の中の〕いくつかの見にもとづいて理解されるべきか。【答】二つ〔の見〕、あるいは、すべて〔の見〕にもとづいてである。

【問】捨置されたことがら⁽⁴²⁾に対する見は、〔五見の中の〕いくつかの見にもとづいて理解されるべきか。【答】二つ〔の見〕、あるいは、すべて〔の見〕にもとづいてである。

〔過去世と未来世とを構想する見と、捨置されたことがらに対する見は、〕定義の点からいえば、辺執見と邪見との二つ〔の見〕にもとづいてである。付随要素を含む点からいえば、すべて〔の見〕にもとづいてである。

⁽⁴¹⁾ 過去世、未来世の観点に基づく見の解説は、『梵網經』所説の六十二見をふまえたものと考えられる。『梵網經』については本庄〔2014: 366–387 (no. 3050)〕を参照。また、同經の当該箇所に関しては『婆沙論』(T [27] 996b–1002b) が詳細に論じる。YBh (T [30] 603c19–21) の関連箇所も『梵網經』の六十二見をふまえていると考えられる。

⁽⁴²⁾ ここでの *avyākṛtavastu* (不可記事) とは、善不善を離れた無記なることがらではなく、「世間は常住であるか否か」などの、ブッダが回答しなかったことがらを指すと考えられる。Cf. VinSg T [30] 654c.

1.1.5.1.4.1.30.3 特に有身見について

1.1.5.1.4.1.30.3.1 有身見に摂められる五つの過失

【AS】 AS-Ms 4r4 (Gokhale 17.5–7) , ASVy-Ms 13v2–4 (Li [2016: 224.21–23]) , cf. 早島 56.

Vy 13v3 kaṃ doṣaṃ paśyatā bhagavatā skandhadhātuvāyataneṣu pañcabhir ākārair⁽⁴³⁾ ātmā
pratikṣiptaḥ. satkāyadr̥ṣṭiparighītān pañca doṣān paśyatā. vilakṣaṇatādoṣaṃ anityatā-
doṣaṃ asvātantryadoṣaṃ⁽⁴⁴⁾ nirdehatādoṣaṃ ayatnatomokṣadoṣaṃ ca.

【ASBh】 ASBh-Ms 8r4–v3 (Tatia 6.19–7.2) , ASVy-Ms 13v4–6 (Li [2016: 224.24–225.5]) , cf. 早島 57.

Bh 8r5 rūpādayo nātmā, **vilakṣaṇatvāt**,⁽⁴⁵⁾ na hi ta ātmalakṣaṇā iti. na teṣv ātmā,
Vy 13v5 **anityatādoṣāt**, na hy āśrayābhāva āśritaṃ bhavatīti. na rūpavān ātmā, **asvātantrya-**
doṣaprasaṅgāt, asvātantryadoṣaḥ teṣv avasāvartanāt, na hi rūpavedanāsaṃjñāsamskāra-
vijñānavantam ātmānaṃ samanupaśyatīti. na tebhyo 'nyatrātmā, **nirdehatādoṣāt**,
Bh 8v1 na hi vinā dehenātmaparikalpa upalabhyata iti.⁽⁴⁶⁾ athaivaṃvidham ātmānaṃ kaścit
Bh 8v2 parikalpayet tathāpi nopapadyate 'rūpādika ātmā, **ayatnatomokṣadoṣāt**, dehādibandhanābhāve⁽⁴⁷⁾
Vy 13v6 hi svarasenaiva mokṣaḥ syād iti.
Bh 8v3

⁽⁴³⁾ ākārair] ASVy-Ms, kāraṇair AS-Ms. Cf. 『集論』 (T [31] 664c20: 相), AS-Tib. (D50a4, P57b6: rnam pa).

⁽⁴⁴⁾ asvātantryadoṣaṃ] ASVy-Ms, asvāsthadoṣaṃ AS-Ms.

⁽⁴⁵⁾ vilakṣaṇatvāt] ASVy-Ms, tadvilakṣaṇatvāt ASBh-Ms.

⁽⁴⁶⁾ na rūpavān ātmā, asvātantryadoṣaprasaṅgāt, **asvātantryadoṣaḥ teṣv avasāvartanāt**, na hi **rūpavedanāsaṃjñāsamskāravijñānavantam ātmānaṃ samanupaśyatīti**. na tebhyo 'nyatrātmā, nirdehatādoṣāt, na hi vinā dehenātmaparikalpa upalabhyata iti] em., na rūpavān ātmā, asvātantryadoṣaprasaṅgāt. na tebhyo 'nyatrātmā, nirdehatādoṣāt. na hi vinā dehenātmaparikalpa upalabhyata iti. **asvātantryatadoṣaḥ teṣv avasāvartanāt. rūpavedanāsaṃjñāsamskāra-vijñānavantam ātmānaṃ samanupaśyatīti** ASBh-Ms.

当該箇所について本文に大きな混乱がみられる。詳細については本稿脚注 (48) を参照。

⁽⁴⁷⁾ dehādibandhanābhāve] ASBh-Ms, dehabaddhābhāve ASVy-Ms.

1.1.5.1.4.1.30.3 特に有身見について

1.1.5.1.4.1.30.3.1 有身見に摂められる五つの過失

いかなる過失を見て、世尊は五つのあり方で蘊・界・処における我を斥けたのか。【答】有身見に含まれる五つの過失を見ることによってである。〔つまり我が〕①特徴を異にするという過失、②無常であるという過失、③支配性を欠くという過失、④身体を持たないという過失、⑤努力なしに解脱するという過失である。

①色など（五蘊）は我ではない。特徴を異にしているからである。なぜならば、それら（五蘊）は私の特徴を持たないからである、という。②それら（五蘊）において我はない。〔我が〕無常であるという過失が〔付随してしまう〕からである。なぜならば、所依（五蘊）が無くなる場合に、依るもの（我）は存在しなくなるからである、という。③我は色を所有するものではない。〔我が〕支配性を欠くという過失が付随してしまうからである。支配性を欠くという過失があるのは、それら（五蘊）に対して〔我は〕支配力をもたないことによる。なぜなら我を、色受想行識を有するものとしては観察しないからである、という⁴⁸⁹。④それら（五蘊）とは別個に我は無い。〔我が〕身体を持たないという過失が〔付随してしまう〕からである。なぜならば、身体がなければ、私の構想は得られないからである、という。⑤もし誰かが、我をこのようなもの（身体/五蘊なき我）として構想するとしても、そうであったとしても、色など（五蘊）を欠く我はありえない。〔我が〕努力なしに解脱するという過失が〔付随してしまう〕からである。なぜならば、〔我に〕身体などとの結合関係がない場合には、〔何もせずに〕まったくひとりでに解脱することになってしまうからである、という。

⁴⁸⁹ 五つの過失のうち、③④に言及する箇所には混乱がみられる。漢訳『雑集論』および ASBh-Ms にしたがって暫定的に校訂を行った。以下に本稿の校訂テキストならびに写本、その他の校訂テキスト、漢訳『雑集論』を提示する。

校訂テキスト

③ na rūpavān ātmā, asvātantryadoṣaprasaṅgāt, **asvātantryadoṣaḥ teṣv avaśavartanāt**, na hi rūpavedanāsaṃjñāsaṃskāraviññānavantam ātmānaṃ samanupaśyatīti. ④ na tebhya 'nyatrātmā, nirdehatādoṣāt, na hi vinā dehenātmaparikalpa upalabhyata iti.

ASBh-Ms

③ na rūpavān ātmā, asvātantryadoṣaprasaṅgāt. ④ na tebhya 'nyatrātmā, nirdehatādoṣāt. na hi vinā dehenātmaparikalpa upalabhyata iti. **asvātantryatadoṣaḥ teṣv avaśavartanāt. rūpavedanāsaṃjñāsaṃskāraviññānavantam ātmānaṃ samanupaśyatīti.**

ASBh (Tatia)

③ na rūpavān ātmā, asvātantryadoṣaprasaṅgāt. ④ na tebhya 'nyatrātmā, nirdehatādoṣāt. na hi vinā dehenātmaparikalpa upalabhyata iti. **asvātantryatādoṣaḥ teṣv avaśavartanāt.**

ASVy (Li [2016])

③ na rūpavān ātmā, asvātantryadoṣaprasaṅgāt. ④ na tebhya 'nyatrātmā, nirdehatādoṣāt. na hi vinā dehena tata parikalpa upalabhyata iti.

『雑集論』T [31] 698b25–29:

③不自在過失者謂不應觀我有色等。我應不自在故。所以者何。我於色等不能自在轉故。④無身過失者謂非離色等異處有我。我應無身故。所以者何。離身計我不可得故。

1.1.5.1.4.1.30.3.2 二十項からなる有身見

【AS】 AS-Ms 4r4–5 (Gokhale 17.8–10) , ASVy-Ms 13v6–14r1 (Li [2016: 225.6–9]) , cf. 早島 56.

yā pañcasūpādānaskandheṣu viṃśatikotikā satkāyadr̥ṣṭiḥ, rūpam ātmeti⁽⁴⁹⁾ samanupaśyati, rūpavantam ātmānam, ātmīyaṃ rūpam, rūpa ātmānam, vedanāṃ saṃjñāṃ saṃskārān⁽⁵⁰⁾ vijñānam ātmeti samanupaśyati, vijñānavantam ātmānam, ātmīyaṃ vijñānam, vijñāna ātmānam.

1.1.5.1.4.1.30.3.3 我見と我所見

【AS】 AS-Ms 4r5 (Gokhale 17.10–11) , ASVy-Ms 14r2 (Li [2016: 225.9–10]) , cf. 早島 56.

tatra katy ātmadr̥ṣṭayaḥ katy ātmīyadr̥ṣṭayaḥ. pañcātmadr̥ṣṭayaḥ pañcadaśātmīyadr̥ṣṭayaḥ.

【ASBh】 ASBh-Ms 8v3–4 (Tatia 7.3–4) , ASVy-Ms 14r2–3 (Li [2016: 225.11–12]) , cf. 早島 57.

rūpam ātmeti samanupaśyati vedanā saṃjñā saṃskārā⁽⁵¹⁾ vijñānam ātmeti samanupaśyatīty etāḥ pañcātmadr̥ṣṭayaḥ. śeṣāḥ pañcadaśātmīyadr̥ṣṭayaḥ.

⁽⁴⁹⁾ rūpam ātmeti] ASVy-Ms, rūpa /// (4r5) tmeti AS-Ms (写本破損部は一文字分欠損している) .

⁽⁵⁰⁾ vedanāṃ saṃjñāṃ saṃskārān] AS-Ms, vedanāsaṃjñāsaṃskārān ASVy-Ms.

⁽⁵¹⁾ vedanā saṃjñā saṃskārā] ASBh-Ms ASVy-Ms, vedanāṃ saṃjñāṃ saṃskārān Tatia 早島.

1.1.5.1.4.1.30.3.2 二十項からなる有身見

【問】五取蘊に対する有身見は二十項からなる。〔すなわち〕「色が我である」と見る、「我は色を有する」、「色は我所である」、「色において我がある」、「受・想・行・識が我である」と見る、「我は識を有する」、「識は我所である」、「識において我がある」〔と見る有身見である〕。

1.1.5.1.4.1.30.3.3 我見と我所見

これらの中で、我見はいくつあるのか。我所見はいくつあるのか。【答】五つは我見である。十五は我所見である^㉔。

「色が我である」と見る、「受・想・行・識が我である」と見るという以上の五つは我見である。残りの十五は我所見である。

^㉔ 二十項目からなる有身見については内藤 [1985]、袴谷 [2017] を参照。その他、『瑜伽論』「摂決摂分」においても言及が見られ、この箇所と同様に、五つを我見とし、十五を我所見とする。

Cf. VinSg T [30] 623c16–18, D zhi 114b7–115a2, P zi 120a5–7:

云何迷苦有十隨眠。略五取蘊總名為苦。愚夫於此五取蘊中起二十句薩迦耶見。五句見我。餘見我所。是名迷苦薩迦耶見。

ji ltar sdug bsngal gyi bden pa la bag la nyal bcu log par zhugs pa yin zhe na | mdor na nye bar len pa'i phung po lnga sdug bsngal ba zhes brjod pa la byis pa rnams ni nye bar len pa'i phung po lnga po de dag nyid la 'jig tshogs la lta ba'i mu nyi shu las mu lngas bdag tu lta bar byed la | lhag ma rnams kyis ni bdag gir lta bar byed de | de ltar na 'jig tshogs la lta ba ni sdug bsngal gyi bden pa la log par zhugs pa yin par blta bar bya'o ||

1.1.5.1.4.1.30.3.4 我所見である理由

【AS】 AS-Ms 4r5–6 (Gokhale 17.11–12) , ASVy-Ms 14r3–4 (Li [2016: 225.15–16]) , cf. 早島 58.

kena kārānena pañcadaśātmiya⁽⁵³⁾-dr̥ṣṭayaḥ. sambandhātmiyatām upādāya, vaśavarty-
ātmiyatām⁽⁵⁴⁾ upādāya, avinirbhāgavṛtṭyātmiyatām copādāya.⁽⁵⁵⁾

【ASBh】 ASBh-Ms 8v4–9r1 (Tatia 7.5–9) , ASVy-Ms 14r4–6 (Li [2016: 225.17–21]) , cf. 早島 59.

rūpavān ātmā⁽⁵⁶⁾ yāvad vijñānavān iti **sambandhenātmiyatā**, sa hi⁽⁵⁷⁾ tatsambandhāt
tadvān bhavatīti. ātmīyaṃ rūpaṃ yāvad vijñānam iti **vaśavartyātmiyatām upādāya**,
yasya hi yadvaśena vartate dāne viniyoge vā tasya tadātmiyam ity ucyate. rūpe yāvad
vijñāna ātmety **avinirbhāgavṛtṭyātmiyatā**, ayam ātmaṣv anusṛto viśṛtaḥ⁽⁵⁸⁾ prakṣipto
'ngāṅgānusārigata iti parikalpanāt.

⁽⁵³⁾ pañcadaśātmiya] ASVy-Ms, pañc /// (4r6) tmīya AS-Ms (写本破損部は二文字分欠損している) .

⁽⁵⁴⁾ vaśavartyātmiyatām] ASVy-Ms, vaśavartanātmiyatām AS-Ms.

⁽⁵⁵⁾ copādāya] AS-Ms, upādāya ASVy-Ms.

⁽⁵⁶⁾ rūpavān ātmā] ASVy-Ms, rūpavān ASBh-Ms.

⁽⁵⁷⁾ sa hi] 佐久間, sā hi ASBh-Ms (sa | hi とも読める) ASVy-Ms.

⁽⁵⁸⁾ viśṛtaḥ] ASBh-Ms ASVy-Ms 佐久間, viśṛtaḥ Tatia.

1.1.5.1.4.1.30.3.4 我所見である理由

【問】いかなる理由によって、〔その〕十五は我所見であるのか。【答】結合による我所性によってと、支配による我所性によってと、不可分にあることによる我所性によってである。

「我は色を有する」乃至「〔我は〕識を有する」というのが、「結合による我所性」である。なぜならば、それ（我）は、それら（色など）と結び付くので、それら（色など）を有するものとなるからである。「色は我所である」乃至「識は〔我所である〕」というのが、「支配による我所性によって」である。なぜなら、ある物がある人の力で、布施したり配ったりする場合、その物はその人の我所と呼ばれるからである。「色において〔我がある〕」乃至「識において我がある」というのが、「不可分にあることによる我所性」である。「この我は、これら（色など）に付き従い（anusṛta）、遍在し（visṛta）、組み込まれ（prakṣipta）、それぞれの部分に付き従っている（anusārigata）」と構想するからである。

1.1.5.1.4.1.30.3.5 確認された事物に関わるものか、確認されていない事物に関わるものか

【AS】 AS-Ms 4r6 (Gokhale 17.12–13) , ASVy-Ms 14r6–v1 (Li [2016: 225.22–23]) , cf. 早島 58.

satkāyadr̥ṣṭir nirūpitavastukā vaktavyā, anirūpitavastukā vaktavyā. anirūpitavastukā⁽⁵⁹⁾
vaktavyā rajjvām sarpabuddhivat.

【ASBh】 ASBh-Ms 9r1–2 (Tatia 7.10–12) , ASVy-Ms 14v1–2 (Li [2016: 226.1–3]) , cf. 早島 59.

anirūpitavastukatvaṃ punā rūpam ity evamādi lakṣaṇaṃ nirūpayata ātmadr̥ṣṭer
anavakāśāt. tadyathā rajjum sarpato gr̥hṇāti kaścit sahasā, na tu⁽⁶⁰⁾ punā rajjur⁽⁶¹⁾ iti
nirūpayams tām⁽⁶²⁾ sarpato gr̥hṇīyād iti.

⁽⁵⁹⁾ anirūpitavastukā] ASVy-Ms, anirūpitavastu AS-Ms.

⁽⁶⁰⁾ na tu] ASVy-Ms, na ASBh-Ms.

⁽⁶¹⁾ rajjur] ASBh-Ms, rajjum ASVy-Ms.

⁽⁶²⁾ nirūpayams tām] ASVy-Ms, nirūpayatas tām na ASBh-Ms.

1.1.5.1.4.1.30.3.5 確認された事物に関わるものか、確認されていない事物に関わるものか

【問】有身見は確認された事物に関わるものであると言うべきか、確認されていない事物に関わるものであると言うべきか。【答】確認されていない事物に関わるものであると言うべきである。縄に対して蛇〔を認識する〕知のように⁶³⁾。

「確認されていない事物に関わるもの」とは、後に改めて「色である」云々という特徴を確認する者には、我見が生ずる余地はないからである。例えば、ある人が縄を蛇だと咄嗟に (sahasā) 把握するが、後に改めて「縄である」と確認すれば、それを蛇であるとは把握し得ないように。

⁶³⁾ 有身見に関する類似した議論が、『婆沙論』(T [27] 36a16–25)、『顯揚論』(T [31] 555b22–27) にもみられる。

略号および参考文献一覧

BK-I	Bauddhakośa I, See 斎藤ほか [2011] .
BK-II	Bauddhakośa II, See 斎藤ほか [2014] .
BK-III	Bauddhakośa III, See 榎本ほか [2014] .
BK-IV	Bauddhakośa IV, See 宮崎ほか [2017] .
BK-V	Bauddhakośa V, See 室寺ほか [2017] .
Ch.	Chinese translation
D	sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka
em.	emended
Gokhale	ゴーカレー本, See AS.
ins.	insert(s)
Ms	Manuscript
om.	omitted in
P	Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka
T	大正新脩大蔵経
Tatia	タティア本, See ASBh.
Tib.	Tibetan translation
佐久間	対タティア本コリゲンダ, See 佐久間 [1996] .
早島	早島本 (『インド大乘仏教瑜伽行唯識学派における聖典継承と教義解釈の研究』), See AS.
卅続	新纂大日本続蔵経 (卅続蔵経)

一次資料

梵文

AKBh	<i>Abhidharmakośa-bhāṣya</i> . Ed. by P. Pradhan, <i>Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu</i> , Tibetan Sanskrit Works Series 8, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
AS(-Ms)	<i>Abhidharmasamuccaya</i> . Ed. by V. V. Gokhale, “Fragments from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga,” <i>Journal of the Bombay Branch of the Royal Asiatic Society</i> , New Series Vol. 23, 1947, pp. 13–38. 早島 理 『インド大乘仏教瑜伽行唯識学派における聖典継承と教義解釈の研究』, 平成 13 年度～平成 14 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) (課題番号: 13610019) 研究報告書, 2003. Cf. ed. by P. Pradhan, <i>Abhidharma Samuccaya of Asanga</i> , Visva-Bharati Studies 12, Santiniketan: Visva-Bharati, 1950.

- (For the Sanskrit manuscript, see Li [2013] [2014] [2015] [2016] , Li & Kano [2014] .)
- ASBh(-Ms) *Abhidharmasamuccaya-bhāṣya*. Ed. by Nathmal Tatia, *Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam*, Tibetan Sanskrit Works Series 17, Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1976.
See also AS (早島).
(For the Sanskrit manuscript, see Li [2015] [2016] , 佐久間 [1996] .)
- ASVy(-Ms) *Abhidharmasamuccaya-vyākhyā*. Tib. D (4054), P (5555).
See also AS (早島).
(For the Sanskrit manuscript, see Li [2015] [2016] , Li & Kano [2014] .)
- PSk *Pañcaskandhaka*. Ed. by Li Xuezhong and Ernst Steinkellner with a contribution by Toru Tomabechi, *Vasubandhu's Pañcaskandhaka*, Beijing: China Tibetology Publishing house; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2008.
- PSkV *Pañcaskandhaka-vibhāṣā*. Ed. by Jowita Kramer, *Sthiramati's Pañcaskandhakavibhāṣā*, Beijing: China Tibetology Publishing House; Vienna: Austrian Academy of Sciences Press, 2013.
- TrBh *Triṃśikā-bhāṣya*. Ed. by Sylvain Lévi, *Vijñaptimātratāsiddhi : deux traités de Vasubandhu : Viṃśatikā (La vingtaine) accompagnée d'une explication en prose et Triṃśikā (La trentaine) avec le commentaire de Sthiramati*, Paris: Librairie Ancienne Honoré Champion, 1925.
Ed. by Hartmut Buescher, *Sthiramati's Triṃśikāvijñaptibhāṣya: Critical Editions of the Sanskrit Text and its Tibetan Translation*, Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2007.
- YBh *Yogācārabhūmi*. Ed. by Vidhushekhara Bhattacharya, *The Yogācārabhūmi of Ācārya Asaṅga: the Sanskrit text compared with the Tibetan version*, part 1, Calcutta: The University of Calcutta, 1957.
- VinSg *Viniścayasamgrahāṇī*. Tib. D (4038), P (5539).

漢訳

- 『中阿含』 瞿曇僧伽提婆訳. T [1] (26).
『婆沙論』 『阿毘達磨大毘婆沙論』 五百大阿羅漢等造, 玄奘訳. T [27] (1545).
『瑜伽論』 『瑜伽師地論』 弥勒菩薩説, 玄奘訳. T [30] (1579).
『顯揚論』 『顯揚聖教論』 無著菩薩造, 玄奘訳. T [31] (1603).
『集論』 『大乘阿毘達磨集論』 無著菩薩造, 玄奘訳. T [31] (1605).
『雜集論』 『大乘阿毘達磨雜集論』 安慧菩薩糝, 玄奘訳. T [31] (1606).
『雜集論述記』 『大乘阿毘達磨雜集論述記』 窺基撰. 卅統 [48] (796).

二次資料 (欧文)

Ahn, Sung-doo

- [2003] *Die Lehre von den Kleśas in der Yogācārabhūmi*, Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

Li, Xuezhū 李 学竹

- [2013] “Diplomatic Transcription of Newly Available Leaves from Asaṅga’s *Abhidharmasamuccaya* —Folios 1, 15, 18, 23, 24—,” *Annual Report The International Research Institute for Advanced Buddhism at Soka University* (= ARIRIAB) Vol. XVI, pp. 241–253.
- [2014] “Diplomatic Transcription of Newly Available Leaves from Asaṅga’s *Abhidharmasamuccaya* —Folios 29, 33, 39, 43, 44—,” ARIRIAB Vol. XVII, pp. 195–205.
- [2015] “Diplomatic Transcription of the Sanskrit Manuscript of the *Abhidharmasamuccaya-vyākhyā* —Folios 2v4–8v4—,” ARIRIAB Vol. XVIII, pp. 275–283.
- [2016] “Diplomatic Transcription of the Sanskrit Manuscript of the *Abhidharmasamuccaya-vyākhyā* —Folios 8v4–18r1—,” ARIRIAB Vol. XIX, pp. 217–231.

Li, Xuezhū 李 学竹 & Kano, Kazuo 加納 和雄

- [2014] “Restoration of Sanskrit text in missing leaves (fols. 2, 6, 7) of the *Abhidharmasamuccaya* manuscript on the basis of the *Abhidharmasamuccayavyākhyā* manuscript,” *China Tibetology* 23, pp. 53–63.

(和文)

阿毘達磨集論研究会

- [2015] 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(1)『インド学チベット学研究』19, pp. 57–96.
- [2016] 「梵文和訳『阿毘達磨雜集論』—安慧による冒頭偈—」『インド学チベット学研究』20, pp. 24–52.
- [2017] 「梵文和訳『阿毘達磨集論』(2)『インド学チベット学研究』21, pp. 55–86.

榎本 文雄 ほか

- [2014] 『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語 —仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集— バウッダコーシャ III』インド学仏教学叢書 17, 山喜房佛書林.

斎藤 明 ほか

- [2011] 『『俱舍論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集 —仏教用語の用例集(バウッダコーシャ) および現代基準訳語集 1—』インド学仏教学叢書 14, 山喜房佛書林.

- [2014] 『瑜伽行派の五位百法 — 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集 — バウッタコーシャ II』インド学仏教学叢書 16, 山喜房佛書林.

佐久間 秀範

- [1996] 『タティア校訂版『阿毘達磨雜集論』梵語索引およびコリゲンダ』山喜房佛書林.

瀧川 郁久

- [2011] 「瑜伽行派アビダルマ論書の五見の定義」『久遠』2, pp. 16–31.

田端 哲也

- [1976] 「〈書評〉佐々木現順編著『煩惱の研究』」『大谷学報』56-1, pp. 65–67.

タン ソウチャイ

- [2003] 「説一切有部における邪見の概念 — 『俱舍論』『随眠品』を中心として —」『仏教文化研究論集』7, pp. 58–84.

内藤 昭文

- [1985] 「二十種の有身見について（試論）」『龍谷大学大学院佛教学研究室年報』1, pp. 27–26.

袴谷 憲昭

- [2017] 「二十種有身見考」『駒澤大学禅研究所年報』29, pp. 81–109.

本庄 良文

- [2014] 『俱舍論註ウパーイカーの研究』（上・下）大蔵出版.

宮崎 泉 ほか

- [2017] 『『中観五蘊論』における五位七十五法対応語 — 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集 — バウッタコーシャ IV』インド学仏教学叢書 20, 山喜房佛書林.

室寺 義仁 ほか

- [2017] 『『瑜伽師地論』における五位百法対応語ならびに十二支縁起項目語 — 仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集 — バウッタコーシャ V』インド学仏教学叢書 21, 山喜房佛書林.

吉元 信行・玉井 威

- [1975] 「梵文阿毘達磨集論における煩惱の諸定義」『佐々木現順編著『煩惱の研究』』清水弘文堂, pp. 221–255.

Annotated Japanese Translation of the *Abhidharmasamuccaya* and its *Bhāṣya* (3)

Summary

This paper is a continuation of “Annotated Japanese Translation of the *Abhidharmasamuccaya* and its *Bhāṣya* (2)” and intends to revise the Sanskrit texts of the *Abhidharmasamuccaya* and its *Bhāṣya* and to make a Japanese translation of them.

This paper gives translation to a part of the establishment (*vyavasthiti*) of *saṃskāra* in the first *tridharma* chapter of the first part, i.e., the *maula* part. In the establishment of the *saṃskāra*, the *caitasikadharma*s are enumerated and defined in terms of their characteristics (*lakṣaṇa*) and functions (*karman*). In this part *rāga*, *pratigha*, *māna*, *avidyā*, *vicikitsā* and five-*drṣṭis* are enumerated and defined. Furthermore, five-*drṣṭis* are classified from some points of view such as *ātmadrṣṭi* and *ātmīyadrṣṭi*.

The translation was done by Abhidharmasamuccaya Study Group: Yoshihiko Nasu prepared a working translation and annotations, then Kazuo Kano and all other members examined and revised them. Li Xuezhu gave us a full cooperation in editing and revising the Sanskrit texts included in this paper.

Leader:	Yoshihiko Nasu (Social Welfare Corporation Kongojushinkai)
Members:	Kazuo Kano (Komazawa University)
	Li Xuezhu (China Tibetology Research Center)
	Akira Yoshida (Ryukoku University)
	Shun'ei Matsushita (Otani University)
	Satoshi Hayashima (Ryukoku University)
	Takeshi Yokoyama (JSPS Research Fellow)
	Yuki Takatsukasa (Kyoto University)
	Mitsuru Kenchu (Ryukoku University)
	Takanori Fukita (Bukkyo University)
	Hironori Tanaka (Bukkyo University)
	Minori Okuno (Ryukoku University)
	Keiki Nakayama (Kyoto University)

(Synopsis)

- 1.1.5.1.4.1.20 *rāga*
- 1.1.5.1.4.1.21 *pratigha*
- 1.1.5.1.4.1.22 *māna*
- 1.1.5.1.4.1.23 *avidyā*
- 1.1.5.1.4.1.24 *vicikitsā*
- 1.1.5.1.4.1.25 *satkāyadrṣṭi*
- 1.1.5.1.4.1.26 *antaḡrāhadrṣṭi*

- 1.1.5.1.4.1.27 *dr̥ṣṭiparāmarśa*
- 1.1.5.1.4.1.28 *śīlavrataparāmarśa*
- 1.1.5.1.4.1.29 *mithyādr̥ṣṭi*
- 1.1.5.1.4.1.30 Detailed explanations of *dr̥ṣṭis*
- 1.1.5.1.4.1.30.1 Reifying *dr̥ṣṭis* and annihilating *dr̥ṣṭis*
- 1.1.5.1.4.1.30.2 *dr̥ṣṭis* concerning the past, the future and the useless subject matters
- 1.1.5.1.4.1.30.3 Some explanations exclusively on *satkāyadr̥ṣṭi*
- 1.1.5.1.4.1.30.3.1 Five absurdities implicated in *satkāyadr̥ṣṭi*
- 1.1.5.1.4.1.30.3.2 Twenty types of *satkāyadr̥ṣṭi*
- 1.1.5.1.4.1.30.3.3 *ātmadr̥ṣṭi* and *ātmīyadr̥ṣṭi*
- 1.1.5.1.4.1.30.3.4 The reasons why the fifteen *satkāyadr̥ṣṭis* are *ātmīyadr̥ṣṭis*
- 1.1.5.1.4.1.30.3.5 Whether or not each of *satkāyadr̥ṣṭis* concerns the thing which is correctly ascertained

キーワード *Abhidharmasamuccaya*、『阿毘達磨集論』、『阿毘達磨雜集論』、無着、安慧